

Title	昭和拾年春期見學旅行記 目的地-房總方面
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.161(343)- 165(347)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和拾年春期見學旅行記

目的地——房總方面

五月二十七日(日)晴、御指導下さる伊木先生外、教授先輩七名、學生十三名の一行は午前八時十五分兩國驛を發した。

十時四十七分、先づ房總東線大原驛に降りて東約一料の天台宗大聖寺へ向ふ。子供でも頭のつかへる程小さな然も唯一のバスに、お互ひの膝にまで腰を下して乗り込み、その上天日に晒された魚から發する惡臭に襲はれて、一同は閉口どころか思はず悲鳴をあげた。自動車が出るとホットして、早速隣りの照願寺へ飛び込んでしまつた程である。或はこんな事も旅の一興かも知れない。波切不動堂と彫つた石を見ながら改めて大聖寺の門に入る。境内の不動堂(大正五年五月二十四日特別保護建造物指定)が見學の目的なのであつた。構造形式は桁行三間、梁行三間、單層屋根四注造茅葺で、その建設年代は詳かではないが、南總郡郷考(鳥海醉車著)には「小濱浦不動堂は竹田といへる工匠の建る所にして凡一千年餘を経たりとぞ」とあり、房總志料(中村國香著)卷二にも同じやうに見えてゐる。併しこの推定が餘りに古過ぎる事は云

ふまでもない。且つこの堂は、もと中根村の清水寺觀音堂のであつたものが、其處を新築した爲、古堂は當所に移されたのであるとされて居る。清水寺の舊記は無いが、實際この不動堂の棟札に、
(イ) 御地頭阿部兵庫之助

觀世音御寶前大工泉劬日根郡小野里邑小野杉右衛門

別當清水寺現住廿二世堅者傳慶奉再興之

(ロ) 奉再興不動堂一字成就之攸、大願施主矢野勘助奉再興之也

時貞享三丙寅年七月廿五日

當寺別當堅者法印傳光

とあるに依つても、その事實は窺へる。又、舊不動堂腐朽の爲め新堂を建てた所、その清水寺に一人の僧が飄然と現はれて、今は不用となつた舊堂を買収し、何人も知らぬ間に受授をすませて當地に移したと云ふ傳説さへも残つて居ることである。更に大正十三年八月、堂宇の梁の一部各所に何れも三四字づゝ數行に書いたものが發見された。殆ど消えて判讀し難いが、大體次の通りである。

△	元和四年△午	(カ)
△	月 廿七日	
△	△△△	御
△	△△	同
△	△△	竹
△	△△	伊藤
△	拾	△

(梵字)奉造立	三
間四面一字成	(考、樂カ)
就二世安△	
△△堂音羽山清水	
古堂不思議	(カ)
故寶永△子一	△
廿七日大工具須カ	

執筆 覺如

康永三年甲申仲冬朔日外題書之

釋 覺如 七十五

百八拾(九)
人 貳百
如
(以下全く不明)

(以下不明)

之を以て考へると、この梁書の最古年代である元和四年は逆算して三百十七年前であるから、推定の建造年代にも近く、且つ建築様式が足利末期のものである事にも相當する。又、前記の貞享三年の移轉と云ふに對して寶永元年と見られるものも出て來たが、元和四年から貞享三年迄は六十八年間であるのに、寶永元年までは八十三年を経て居ることから推考して、古堂を當地に移したと云ふ事實は、或は後者が至當の如くにも考へられないではない。大聖寺を出て、右隣の照願寺(眞宗)に行く。住持さんの留守と云ふにも拘らず特に國寶親鸞聖人傳繪四巻を始め、信愛上人宛で西山隱士と署名した水戸光圀自筆の書簡、唐筆の善導大師影像等を見ることが出來たのは一行の僥倖とするところであつた。就中、有名な繪傳は法眼淨賀の筆と稱せられ、土佐派の筆意を傳へた鎌倉時代のもので、親鸞一生の事歴が描かれてあるが、その趣旨は第四卷の奥書によつて知ることが出来る。

奥書云

右緣起畫圖之志偏爲知恩報德不爲戲論狂言刺又染紫毫拾翰林其跡尤杜其詞是荷付冥付顯有痛有恥雖然只憑後見賢者之取捨無顧當時愚案之訛謬而已

于時永仁第三層應鐘中旬第二天至晴時終草書之篇畢

中食後零時五十一分再び大原驛を發して安房小湊驛に着いたのが一時四十五分、直ちにタクシーに分乗して海岸沿ひに東南約一軒、誕生寺に詣る。門前には土産を賣る店が並んで居て、四時賓客の絶えないことをしのばせてゐる。云ふまでもなく此處は七百有餘年の昔、後堀河天皇の貞應元年二月十六日、力と信念の傑僧日蓮が呱呱の聲を擧げた所で日蓮宗一教派の本山としてこの盛況を見せて居るわけである。門を入ると左側に誕生泉があり、清正堂、子易堂、更に誕生堂等があり、正面が宏壯雄大な祖師堂である。現今の堂宇は天保年間に再築されたもので、間口十六間、奥行十四間半あると云ふ。有栖川宮熾仁親王殿下御染筆の「栖神閣」の額が正面を飾る。一同參詣の後寶物を拜觀する。書院の奥の一部に堅固な倉庫になつて居る第二寶藏がある。若い案内僧の説明を聞きながら鞭の指す方を見る。有栖川宮熾仁親王殿下御筆御首題並法親王御歌等その他數種の寶物が陳列されてある。次いで本堂から地下道を通つて第一寶藏の寶物を見る。大勢の團體客が手を合せんばかりに一々拜觀して居た。以上簡單に見學を済ませてから「あの邊が妙の浦です」と云ふ運轉手の説明を聞きながら清澄寺へ向ふ。

千光山清澄寺は緣起に依れば光仁天皇の實龜二年不思議法師の草創と傳へ、もと天台宗であつたが、慶長年間仲恩房願勢、徳川家康より當寺を附屬せられて以來、眞言宗の靈刹となつた。しか

し世間には寧ろ日蓮の遺跡としてより多く知られて居る。即ち、日蓮が始めて出家得度し、また妙宗開宣をなした靈場は實に此の地なのである。寺は海拔三六三米の山上にあり、自動車で殆んどその近くまで登れる。俗界裏にある誕生寺と、文字通り清澄靜寂の當寺とは全く別天地の感がある。境内の木柵を回らした大杉は大正十三年十二月天然記念物に指定され、高さ五十米、周囲十七米と云ふ。その他老杉古木鬱蒼と茂り、登山路の左右も亦た見事な森林美を呈して居るが、この邊一帶は東京帝國大學農學部演習林となつて居るのである。本堂の參詣を終へて、寶物拜觀の爲め客殿に赴く。その前方に清澄名木の一たる一株二本の大樟あり、またその下に明徳三年壬申八月日銘の古梵鐘がある。寶物には紺紙金泥法華經・十界勸請曼荼羅(敵國降伏曼荼羅といふ)・寶塔曼荼羅坂木・木蘭袈裟及び念珠等、日蓮の遺品と傳ふるものを始め、印度鐵二重舍利塔(傳二位尼政子寄進)・赤旂檀木涅槃像(同上)・清澄寺由來記・春日局消息・行佛性要決(傳弘法大師筆)・法華經第一卷頌(傳菅原道真筆)・薄墨繪旨(仲恩房頼勢へ下されしもの)・虚空藏菩薩金色畫像(傳弘法大師筆)・十六善神(傳智證大師筆)・五百羅漢集會圖・宥座之器并銘(天正二年正木大膳亮寺領寄進狀)・弘治三年里見兵部大輔豐信清澄寺制札・後水尾天皇御宸翰・嶋津家祈願狀・大岡忠相當山論裁許狀寫その他多數あり、中にも山論裁許狀は興味あるものである。一憩の後、境内の名所舊蹟を案内される。庫裡の臺所には二本の大杉の柱が併立し、その傍に左甚五郎作といふ鎮火牛がある。前述の大杉の東側の谷間には不思議法師の祈願して感得したと云ふ星の井戸あり、また大杉より東

南すれば昔慈覺大師圓仁の求聞持法を修し又日蓮も淨水を浴びて練行したと謂はれる練行場がある。それより更に上りて、日蓮の木像を安置する旭森祖師堂を過ぎ、大銅像のある展望臺に出る。建長五年四月廿八日我が偉大なる三十二歳の法華經行者が東面の海上にさし昇る朝日を拜して發した妙法の第一聲を今にして聞く心地がする。この銅像は大正十二年の關東大震災の前々日に立てられたものだが、何の被害もなく、今日その記念にもなつて居ることである。

山を降つて天津驛を發したのは既に四時半、これで愈々第一日の行程を終へ、この儘歸途につく大半の人々と、更に一泊しても一日の旅を續ける者とは安房鴨川驛で別れた。

二

五月二十七日(月)此の日も前日に劣らぬ好天氣に恵まれた。先づ一同は快い早朝の海岸を望みながら、早くも七時五十四分には安房鴨川を發して第二日の行程を進めた。一行は間崎教授及び六名の學生で、昨日この鴨川の吉田屋に一泊したのである。

鴨川では別に鏡忍寺・掛松寺等へ寄ることはなく、最初の目的地は安房郡丸村の長安山石堂寺(天台宗)である。間崎教授の御知已安房神社の宮司さんと偶然にも同車したのだつたが、一先づ南三原驛で別れ、一行は石堂寺に着いた。縁起によれば、當寺は神龜三年丙寅二月行基菩薩の開基で、天竺阿育王塔が安置してあるので石塔寺と號したものであるが、その後天正十三年喜連川左馬守頼氏(鎌倉公方の後胤で幼名石堂丸)が六歳の時から寓居し、里見家から一千石の寄進を受けた事があるので、その時以來塔を

堂と改めたと記されてある。肉類の携帯を禁じた貼札のある門に運慶作の仁王と云ふものを見ながら、稍坂道を上つて本堂の前へ出る。間口八間奥行十間單層屋根四柱造で、規模大きいとは云へないまでも、技術を凝らしたもので大正五年特別保護建造物に認定されて居る。右方の朱塗の多寶塔(三間半四面二層屋根銅瓦葺)は天文十四年の建造で、周圍には美麗な十六個の彫刻があり、境内でも特に眼を惹く建物である。それから住持さんに導かれて本堂に上り、數分の御經をあげた後、堂内に安置する行基作といふ丈七尺二分の大觀世音を拜觀させてもらふ。之も本堂と同時に國寶に指定せられて居る。が、残念なことには薄暗い堂内であるし、その上平常は正面の扉は開けられないと云ふので、横から見ただけであるから、圓滿端嚴なる顔面を判然と見るのは難かしかつた。次いで客殿に通されて什寶物を見せて頂く。多くの畫像等もあるも、最も注目すべきは矢張りこの寺第一の重寶と云はれる阿育王塔である。高さは三寸にも滿つまいが、玻璃珠で作られて居る之の塔は、曾つて文明十八年の火災で埋没不明になつた事があるが、偶々飼育の犬の暗示に依つて再び之を地中に求め得て、その時鐵で破損した部分を後年金屬で修補したと云ふ傳へがある。元來阿育王塔とは、天竺の阿育王が七種の珍寶を以て五輪の塔を造り、中に大聖釋尊の舍利を安置したものであつて、我が日本には江州阿青山、上州白雲山、房州長安山に各一基傳來し、それに依つて三山共に石塔寺と號したもので、之が即ちその中の一なのであると云ふ。時間の餘裕も餘りないので、住持さん並びに斡旋せられた丸村郵便局長の方に禮を述べて直ぐ驛に向ふ。驛までは南する

こと約六軒、勿論神武天皇辛酉元年の創立と稱せられて居る途中の莫越山神社へ寄る暇はもたなかつた。

次の目的地は安房神社であつた。十時半再び南三原驛を發して十分、千倉で今度は省營バスに乗つて、本千倉を経て直ぐ中館と云ふ所まで至る。少し早目ではあつたが、海に面しながら此處で宿から持參の辨當を開き、十一時二十分には所謂七浦濱の海岸沿ひにドライブすることゝなつた。車は三四年型フォードだが、此の邊としては悪くはなく、それよりも道が案外良いので間には七十キロ以上で風を切つて走つた。この道は確か縣道である。過ぎ行く魚村の家々には、舊曆五月の節句で大小數多の鯉のぼりが大空に泳ぎ、途には目立つて女性が働いて居るのを見かけた。約四十分して降りた所は房總半島の南端、野島崎燈臺(東徑三九度五分の地點)の前である。規定時間以外ではあつたが、刺を通じて見學を許され、純白な塔に登る。白濱へ至る頃から見えて居た大島が、案外大きく眼前に白煙をなびかせ、遠く伊豆半島もかすんで居た。此處からは要塞地帯に入るので、この絶景もカメラには收められない。説明に依ると、この燈臺の燈級は第二等閃白色、燈質は電燈千ワット、燭火数は百二十萬ワットで、その光達距離は三十三軒、二十秒毎に一閃光するものである。慶應二年英佛蘭米四箇國との條約に基づいて建設した八燈臺の一で、初設は明治二年十二月十八日だが、現存のものは震災後大正十四年八月十五日改設のものである。此處は全く豫定以外であつたが、運轉手及び燈臺守の好意により途中見學が出来た譯である。

借、更に約三十分の疾走の後、一同は官幣大社安房神社の前に

降り立つた。既に一時。先刻、南三原驛で別れた宮司さんに迎へられ、早速一室に通されて接待を受けた。その室には豫め土器その他十數點が整然と陳列されてあつた。神前に詣で、後宮司さんに境内を案内される。時に土器の破片等が轉がつて居たりした。云ふまでもなく當社御本社(上ノ宮)の祭神は天照大神に仕へ給うた天太玉命で、この祭神の御孫天富命が、神武天皇の勅命を奉じて阿波から忌部を率ゐて當地に移つて來られ、それからこの地を安房と呼ぶ起りとなつて居るが、同命は草莽を拓き民をして生業に安堵せしめ、同時にその太祖を當地——安房郡神戶村大神宮宮ノ谷に奉齋されたものであることが忌部廣成の古語拾遺に見えて居る。之を安房座大神宮と申し、延喜式卷九神祇九には

安房國六座。大二座。小四座。

安房郡二座。並大。

安房坐神社。名神大。月次。新嘗。

とある。従つて今日、御攝社(下ノ宮)にはこの天富命並びに天忍日命(天太玉命御弟神)をお祀りしてある。此の安房座の名を保存する意味でさう名付けたと云ふ公園が、御本社の後の一帯で、櫻、楓が多い。その上から見ると平砂浦は洲の崎までも一望の下で、その邊は水瓜等の速成栽培が行はれてゐるさうである。因みに洲崎の神社並びにこの神戶村の洲宮神社には天太玉命の後神天比理刀咩命(又は天比理刀咩命)が祀られてある。其處を下つて、丁度一の鳥居からすれば數間、社務所への階段を登る前の所を左へ約五十間行くと、懸崖の横穴にコンクリートした塚があつて、忌部塚と記した説明が建つて居る。先年境内から發掘され

た人骨を恐らく忌部氏のものであらうとして、村民集つて此處にこの塚を立てたのは一昨年のことだと宮司さんの話であつた。再び社務所に歸り、用意されてあつた古文書類を見せて頂く。就中、安房國安房郡吾谷山鎮坐安房座神社舊記はその奥書に

右太玉命本宮社記一卷者

神主齋部成邦携來示之回

加姓名印章以爲徵古之

一助云

寶曆九年九月十六日

神道管領長上下部朝臣

(花押)

と見えてゐる。やがて午後二時半、宮司さんに見送られて、三時の汽車に間に合ふやうに自動車を安房北條驛まで急がせ、六時三十五分無事兩國驛着歸京した。茲にこの春の見學旅行紀を綴るにあたり、旅行中各所に於いてうけた御厚意に對し深く感謝の意を表する次第である。(會田倉吉)